

RI\*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0030
調査タイトル	「家政学研究科修了生に対する調査」
論文／雑誌名	4「家政学研究科修了生に対する調査から」 (「Ⅲ家政学部卒業生実態調査からみる家政学部像」の一部) 『日本女子大学家政学部 100 年の歩み』
著者	佐々井啓
掲載ページ	pp.147-151.
発行年	2006.05
出版社	日本女子大学家政学部 100 年研究会



被服学科（被服材料学実験）1989年



家政経済学科（経済学・生活論演習）1995年

日本女子大学進学説明会同時開催  
家政学部シンポジウム  
「21世紀をどう家政学」

**JULY 25  
2000**

**日本女子大学家政学部のめざすもの**  
—環境について考える—

家政学部の各学科で代表する専攻5人が「環境」をテーマとして家政学の現場からの取り組みを語ります。質疑の応答もお待ちしています。

開催日時 7月25日（水）11:00～12:30  
場所 日本女子大学目黒キャンパス 第2館 401教室

シンポジスト  
児童学科 榎本 由起教授  
身体学科 大庭ひる恵教授  
生活学科 室井あゆみ助教授  
被服学科 佐々井 啓教授  
家政経済学科 横田敏子教授

受付 自由会場にお越しください  
家政学部100周年記念品もご用意しています

主催 日本女子大学家政学部 家政学部直営  
〒152-8501  
文京区目黒3-2-1  
電話 03-3842-3121（代表）  
http://www.jfu.ac.jp



家政学部共通（コンピュータ）2000年



家政学部を考える会シンポジウム 2000年

## 目次

はじめに	江澤郁子…………… 3
I 創立者成瀬仁蔵の家政学部構想	一番ヶ瀬康子…………… 5
II 家政学部の教育内容およびその変遷	
1 旧制	館岡孝、赤塚朋子…………… 10
2 新制	宮崎礼子、赤塚朋子… 26
3 通信教育課程	赤塚朋子…………… 85
III 家政学部の卒業生実態調査からみる家政学部像	
1 大正期および昭和前期の本学卒業生に対する調査から	真橋美智子… 95
2 新制家政学部卒業生に対する調査から	沖田富美子、塚原典子…111
3 通信教育課程卒業生に対する調査から	真橋美智子…142
4 家政学研究科修了生に対する調査から	佐々井啓…147
IV 家政学部卒業生の社会的展開	
1 学位取得者に関する調査	館岡孝…153
2 外国人留学生について	大野静枝…161
3 旧制・新制・通信教育—卒業後の社会的活動領域	宮崎礼子…163
V 今後の家政学部に向けて	
1 学部として	大野静枝…171 江澤郁子 佐々井啓
2 各学科より	
児童学科	石井光恵…173
食物学科	丸山千寿子…174
住居学科	定行まり子…175
被服学科	大塚美智子…177
家政経済学科	堀越栄子…178
おわりに	江澤郁子…181
資料 日本女子大学家政学部 100年の年表	赤塚朋子…183

学科の枠をこえた幅広い知識の習得、価値観の形成や精神的な支え、リーダーシップ育成などが含まれている。

本調査にみられる「通信」卒業生では入学前、大学在学時、大学卒業時、卒業後と一貫して専門的知識や資格という職業・専門と関わる学部像と、その一方で教養や広い視野、価値観、人間形成といった本学の伝統的な教育の流れがみられる。

#### 4. 家政学研究科修了生に対する調査から

##### 1) 調査の目的及び方法

日本女子大学家政学研究科は、1961年に児童学専攻、食物・栄養学専攻が設置され、次いで1978年に住居学専攻、被服学専攻、1996年に生活経済専攻が開設され、家政学部5学科の上に大学院修士課程が設置された。また1992年には博士課程である人間生活学研究科が、人間発達学専攻、生活環境学専攻の2専攻として発足した。

このような状況をふまえ、家政学研究科修了生の大学院進学への動機、修了後の進路、社会活動の動向、大学院在学中に受けた教育の評価などを中心に、大学院修了生の実体を明らかにすることが、本調査の目的である。

調査対象は、大学院修了1回生である1963年3月から2000年3月の38回生までの全修了生703名である。全員に対して2000年5月にアンケートを送付し、郵送で回収する調査を行った。回収数は508名（児童学専攻106名、食物・栄養学専攻256名、住居学専攻88名、被服学専攻45名、生活経済専攻13名）で、回収率は72.3%である。

##### 2) 調査対象者の概要

調査の対象となった修了生は、大学卒業後すぐに進学した場合には、1回生は62歳、38回生は25歳である。したがってかなり年齢の幅が広いが、実際に修了時の年齢をみると、最も多いのが24～25歳で、全体の65.4%であり、26～29歳、16.1%、30～39歳、11.3%、40歳以上、4.1%である。したがって、大学院の場合には、全体の三分の一は、大学卒業後すぐに進学した学生より年齢の高い学生が在籍していることになり、実際には62歳以上の修了生がいることになる。また、出身大学では、本学が69.0%を占めている。さらに、全体の70.2%が既婚者であり、子どもの数は、なし（19.3%）、1人（27.6%）、2人（39.1%）、3人以上（14.0%）である。

##### 3) 入学前の家政学研究科像

入学前の状況は、全体の71.3%が大学卒業後すぐに大学院に進学しているが、専攻別にみると、被服（以下、専攻を省略）が最も割合が高く（84.4%）、次いで食物・栄養（75.0%）であり、生活経済は最も低く（46.2%）になっている。生活経済は、開設されてから年数が浅く、いったん社会に出てから現職のまま大学院に進学した者が多いことがわかる。

また住居では就職後退職して進学した者が29.2%になっていることは、専攻の特徴を表しているといえる。食物・栄養でも19.5%であり、同様の傾向がみられる。

大学院への進学動機としては「専門的な研究がしたかった」が454名、全体の89.7%である。次に多い動機は、「指導を受けたい先生がいた」であり、197名で38.9%となっている。

しかし、「日本女子大学の大学院に進みたい」では、最も多い児童が23.6%であるが、最も少ない被服でも13.3%の回答があった。「大学の指導教員に勧められて」という回答も同じような割合を示している。「資格・免許を取りたい」、「家族に勧められて」、「家政学的な視点を学びたかった」という動機も全体としてそれぞれ約8%みられる。

学費（複数回答）については508名中394名が「親族の援助」によっているが、これは77.9%にあたる。「日本育英会奨学金」の占める割合が全体で31.6%、多い児童では38.7%、少ない被服では22.2%となっている。「その他の奨学金」を合わせると、一番多い住居では59.1%になっている。「自己資金」の割合は全体で25.3%であるが、現職のまま進学した者が多い生活経済では、61.5%にもなっている。

#### 4) 修了時の家政学研究科像

修了後の状況では、全体の68.1%がすぐに就職している。その割合が一番高いのは被服(84.4%)であるが、食物・栄養と住居では同じ割合(71.1%)を示している。しかし、博士課程に進学した割合が一番高いのは住居である(17.8%)。実数は少ないが、生活経済でも博士課程への進学者は多くなっている。一方、児童では、すぐに就職した者は56.6%であった。

修了後就職した者と、入学前からの仕事を続けた者について、その業種・職種・勤務形態について尋ねた。

業種では、全体として教育が最も多く(50.4%)、次いで調査・研究(16.3%)、医療・福祉(9.1%)、建設(7.2%)、製造(5.8%)である。専攻別では、教育の割合は被服が最も高く(73.7%)、ついで、児童(53.0%)、食物・栄養(56.4%)であるが、住居は18.8%である。

また、医療・福祉関係では、児童(31.8%)、食物・栄養(6.4%)のみである。住居で最も多いのは建設関係(40.6%)であり、調査・研究(21.9%)がそれに次いでいる。調査・研究は食物・栄養でも19.1%を占めている。また製造は、食物・栄養(8.5%)と被服(7.9%)にみられるが、他の専攻にはほとんどない。

職種では、教員が最も多く、全体で40.5%、次いで、研究(31.2%)、S E(5.2%)、設計(4.9%)となっている。これを専攻別にみると、児童では、教員(40.9%)、研究(15.2%)、福祉指導(6.1%)、事務・秘書(4.5%)となっている。食物・栄養では教員(45.3%)、研究(41.1%)であり、この2職種で96.4%を占め、圧倒的に多くなっている。住居では、研究(31.3%)、設計(28.1%)、教員(15.6%)、事務・秘書(9.4%)で

ある。被服では、教員(60.0%)、研究(12.5%)、事務・秘書(10.0%)である。

勤務形態は、全体としてフルタイムの勤務が69.9%であるが、専攻によっての違いが大きい。たとえば児童ではフルタイム47.0%に対して非常勤・臨時勤務は39.4%であり、住居では93.9%がフルタイムである。また、食物・栄養では72.3%、被服は55.0%である。次に、非常勤・臨時の勤務者は、前に挙げた児童の39.4%、被服の32.5%、食物・栄養の19.1%であった。

就職をした者の転職経験は、全体で44.0%があると答えている。専攻別では、児童(60.3%)、住居(59.4%)が多く、食物・栄養(37.1%)、被服(28.9%)がそれについている。

現在就職していない者127名の再就職の希望については、希望するものは73名(57.5%)であった。専攻別では、児童19名(希望なし7名)、食物・栄養26名(40名)、住居16名(4名)、被服9名(2名)、生活経済3名(1名)となっている。なお、希望業種は教育が多く、全体の60.9%を占め、それについて調査・研究18.8%、医療・福祉7.8%の順であった。

社会活動の経験については、全体では「現在活動している」(50.2%)、「過去に活動した経験がある」(20.9%)、「今後活動してみたい」(12.8%)であり、合計すると83.9%が社会活動に積極的である。割合が高いのは児童(66.0%)、低いのは住居(40.0%)、生活経済(38.5%)であった。

次に、「社会活動を現在している」、「過去にしていた」361名の修了生に対して、その種類を尋ねた。複数回答であるので、多い順に、地域団体(165名)、研究団体(158名)、職域団体(71名)、趣味サークル(68名)、同窓会(67名)、有志団体(66名)、学習サークル(53名)となっている。この傾向は各専攻においてもほぼ同じであった。

公職の経験については、「現在ついている」という回答が全体で13.0%であり、かなり少ない。専攻別では、住居17.5%、児童17.0%、食物・栄養11.8%となっていた。

#### 5) 修了後の家政学研究科像

日常生活への影響としては、全体で「生かされている」(76.4%)、「どちらともいえない」(19.7%)となっている。専攻別では、「生かされている」の割合が、食物・栄養(81.3%)、児童(79.8%)、生活経済(69.2%)、住居(68.9%)、被服(57.8%)である。日常生活に生かされている理由(複数回答)では、最も多いものが「広い視野で考えることができる」であり、388名中215名が回答している。順に、「自分の価値観を形成できた」(192名)、「専門的な知識や技能が身についた」(146名)、「精神的な支えを得た」(132名)、「よい友人を得ることができた」(131名)、「よい教員と出会うことができた」(90名)となっている。

次に職業への影響については、全体で85.6%が「生かされている」と答え、「どちらともいえない」(8.4%)、「生かされていない」(6.0%)となっている。日常生活の場合よりも影響が大きいことは明らかである。また、専攻別にみると、食物・栄養(90.1%)、児童(85.4%)、生活経済(81.8%)、住居(79.1%)、被服(75.6%)となっている。

生かされている理由(複数回答)は407名中、多い順に、「専門的知識や技能」(355名)、「よい教員」(188名)、「広い視野」(163名)、「自分の価値観」(94名)、「社会的に評価の高い大学院を出た」(65名)となっている。また、「よい教員」は46.2%、「広い視野」は40.0%にあたり、これらは本大学院の特徴のひとつであると思われる。

さらに社会的な活動への影響については、全体で57.6%が「生かされている」と答え、31.5%が「どちらともいえない」、10.9%が「生かされていない」と答えている。専攻別では、「生かされている」の多い順に、児童(73.5%)、生活経済(70.0%)、住居(67.4%)、食物・栄養(50.0%)、被服(38.1%)となっている。

生かかされている理由(複数回答)では、261名中、「広い視野」(131名)、「専門的知識や技能」(115名)、「自分の価値観」(105名)、「よい友人」(62名)、「よい教員」(57名)、「精神的な支え」(46名)、「人との付き合い方が身についた」(43名)となっている。

家政学研究科の修了生は、専攻毎の特徴がはっきりしており、それぞれの専攻を生かした職業に就いている修了生が多いことがわかった。また、既婚者で子どものいる割合が多く、職業を持っていても社会的な活動も行い、再教育についての意識も高いのである。また「広い視野で考えることができる」、「自分の価値観を形成できた」とする修了生が多いことは、本学の建学の精神である全人的な教育の一端が浮かび上がってくるのではないだろうか。

注記 1 大正期および昭和前期の本学卒業生に対する調査から

(注1) 東京および奈良女子高等師範学校卒業後、研究生となった者が0.3%を占めるのみである。(『大正の女子教育』246頁)

(注2) 『昭和前期の女子教育』240頁

(注3) 佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程—政府・生徒・学校のダイナミクス』東京大学出版会 2002年 14頁、128～130頁

参考文献(Ⅲ-1,2,3,4)

日本女子大学女子教育研究所編『女子の生涯教育』国土社 1968年

日本女子大学女子教育研究所編『大正の女子教育』国土社 1975年

日本女子大学女子教育研究所編『女子の生涯教育』国土社 1984年

日本女子大学女子教育研究所編集・発行『日本女子大学通信教育課程卒業生に関する調査』

1991年

通信教育創設50周年記念事業委員会 『日本女子大学通信教育の50年』 日本女子大学通信教育課程、1999年

日本女子大学編集・発行『日本女子大学学園事典—創立100年の軌跡』2001年

『日本女子大学紀要 家政学部』 第49号 (2002) pp. 1～30

「日本女子大学の卒業生実態調査」 第1報 家政学部卒業生の場合

第2報 通信教育課程卒業生の場合

第3報 家政学研究科修了生の場合」

日本女子大学家政学部100年研究会

江 澤 郁 子 (研究代表者・名誉教授・戸板女子短期大学学長)

一番ヶ瀬 康子 (名誉教授)

館 岡 孝 (名誉教授)

大 野 静 枝 (名誉教授)

小 川 信 子 (名誉教授)

宮 崎 礼 子 (名誉教授)

沖 田 富美子 (住居学科教授)

佐々井 啓 (被服学科教授)

真 橋 美智子 (教育学科教授)

赤 塚 朋 子 (宇都宮大学助教授)

塚 原 典 子 (新潟医療福祉大学助教授)

日本女子大学家政学部100年の歩み

日本女子大学家政学部100年研究会 編

2006(平成18)年5月20日 初版第2刷発行

発行者 日本女子大学家政学部100年研究会

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

印刷・製本 有限会社 三秀美術印刷